

二席 沖縄県文化振興会 理事長賞

勝ちちゃんの夢

新城 加代子

我が家には、五十年前、兄・安勝が作ってくれた勉強机がある。机の上はベニヤ板で、少しボコボコになっている。私は、グリーンのマットを敷いて今も重宝している。

兄は、皆から、勝ちちゃんと呼ばれていた。三歳年下の私も、大人になるまで、兄のことを勝ちちゃんと呼んでいた。

昭和三十年代、その頃は、戦後のまだ混沌とした状況が残っていた。

社会も生活の苦しい時代、母も小さなソバ屋を営み、生きていくのに精一杯だった。

兄は、中学を卒業後、暮らし向きを考えたのか、近くの家具木工所に見習いとして働いた。

三年経った頃、兄は大阪で家具職人の修業をし、いつか、家具作りをしたいと熱い夢を語った。兄は、夢を目指して、那覇の港から大阪に向かって出発した。

しかし、木工所勤めを三年程して、何故だか兄は木工所を辞め、工場勤めをしていた。仕事が辛かったのか、兄の夢はどうなってしまったのか。その後、母は、生活が立ち行かなくなったのか、兄の将来を考えたのか、大阪から兄を呼び寄せた。兄は、自分の夢であった家具職人として、小さな家具店を開いた。

大阪で習ってきた太鼓張りのダンスや水屋を作った。小さな看板も上げた。看板は兄が作り、文字は字の下手な私が書くことになり、「新城家具店」と兄との合作になった。

私は、高校の授業を終えると、兄が、家具を作った後、専用の土に水を含ませて塗るのだが、乾いた後の土落としは私の仕事だった。土埃が立つので閉口したが手伝った。

その後、那覇市の松川に引越し、家具店を開いた。何年か経った頃、時代のすう勢に勝てず、事業は伸びず店じまいになった。

その後、兄は建築の仕事に就き、住宅の建設に汗水流し働いていた。建物の内部の仕事をやった時は、「はめ込みのダンスは自分が作ったよ」と自分の本領発揮ができたことを喜んで話していた。そして、いつか家族で、兄の運転で石嶺に差しかかった時、「この住宅は自分たちが建てた

よ」と誇らしげだった。職人の兄は、建築現場でも自分の夢を持ち続けていた。現場の写真の兄は、笑顔が溢れていた。

そんな元気な兄が、胃がんになった。私は、心配させまいと兄や母には告げなかった。三ヶ月後、退院になり家族で喜んだのだが、九月に再入院になり、兄の辛さが思われた。その後、兄は、少しずつ体調が整い、笑顔がもどった。

明るい陽射しが降り注いでいる日だった。五十二歳の兄は笑顔だった。「僕、虫歯一本もないよ」と兄は初めて自慢げに私に言った。兄は、「この病棟で僕が一番明るいよ」と言い、「そうねえ」と明るく返したが、私は複雑な思いでいた。

その間、兄が大阪でお世話になっていた従兄の勝一兄さんがお見舞いに来て下さった。兄は尊敬していた勝一兄さんの突然の訪問に、胸を熱

くし、涙が光っていた。

或る日、兄と一緒に廊下を歩きながらのこと。兄は何時になく真剣な表情で「お母さん頼むよ」とポツリと言った。私は、思いがけない一言に、返事に戸惑った。「なんでえ、大丈夫さあ」と元氣な返答をした。兄は、何となく自分の命の最期を思ったのかもしれない。

十二月七日、私は、夜九時、何時ものように、帰り支度をしていた。兄が「帰らないで僕、今日、健康に自信がないから」と言う。兄の言葉が気になって付き添った。暫くして、兄の様子が変わり、急いで母を呼んだ。母も私も「安勝、良く頑張ったね」「安勝兄さん、もういいよ。ありがとうね」と二人で見守った。暫くして、兄は静かに息を引き取った。母も私も涙が止まらなかった。

家族のことをいつも大切に考えていた兄、職人として物を作ることが

好きだった兄、今は、黄泉の国で夢の家具作りに勤しんでいるのかもしれない。

私は、この頃、兄の来し方をみてか、手作りの木工作品に興味が出てきた。沖展等の木工部門に足を止めるようになり、兄が生きていたら、こんな素敵なお品を作れたかなと思いを馳せながら見ている。

今年、十二月八日は、兄・安勝の二十五年忌である。もう二十五年も経ってしまったのかと。在りし日の、ハンサムではないが、白い歯が眩しい精悍な兄が思い出される。兄が好きだった三枚肉料理、魚、てんぷら等、手作りでお供えしたい。

兄が作った勉強机、大分古くなっているが、あと何十年も大丈夫。これからもっと机に向き合いたい。